

生
き
て
い
る
松
田
優
作

丸
山
昇
一

目次

生きている松田優作

2024	1987	1984	1983	1982	1981	1980	1979	1989
181	172	154	140	133	124	063	012	005

シナリオ

21世紀探偵秘帖

フェイス
シャドウ
顔と影

185

注釈

225

文中記載作品データ

233

協力…松田美由紀（OFFICE作）

カバー写真…中村冬夫

デザイン…志村謙（バナナグループスタジオ）



松田優作と著者。1984年、『ア・ホームズ』の撮影現場にて。
撮影／井出情児（キネマ旬報 1995年11月下旬号より）

「丸山さん？ 飯塚いづか*₁です。逝いっちゃった……」

「あ、……」

「通夜、葬式は追って。また」

わずか数秒の、感情をすべて押し殺した電話が、一方的に切れた。セントラル・アーツ*₂の少ない常駐スタッフ、飯塚いづか滋しげるは、多分百人を越す人たちにこれからひとりで連絡をとる。

夜中の何時か、零時少し前だったか。十一月六日。一九八九年。

「あと一週間、保もたんかもしれん」

「あ、……」

「覚悟しといてくれ」

セントラル・アーツ社長、黒澤くろさわ満みつる*₃が、何日か前に、脚本打ち合わせの最中、他に誰もいない時にだしぬけに言った。息を呑む数秒の間合いはあったが、なんで、と聞く気が起きない。

本当に何も聞かされてなかった。そんな呆気なく死ぬ奴じゃない。

計報は、そのセントラル・アーツが製作、日本テレビが放送している新番組の脚本を詰めている最中だった。

『勝手にしやがれヘイ！ブラザー』

柴田恭兵、仲村トオル、中条静夫ちゅうじょうしずおの主演とスタッフは、やはり私がオープニング（第一話）を担当した『あぶない刑事』からつづく面々。第一話から間を置いた三本目の脚本執筆が遅れに遅れ、私は自宅にカン詰め状態で、かなり切羽詰まっていた。

明け方、ようやくラストシーンが見えてきて、ひと息いれた。

あらためて、零時前の計報。

腑ふに落ちない。から、少し腑に落ちてくる。

じゃ、何かい？ もうこの世にはいないってこと？ ということは、二十四時間いつでも当方の都合など関係なく呼び出され、延々と出口の見えそうにない対話につきあわされ、いつ潰されるかわからないプレッシャーをいくつも背負わされたあの苦痛がもうなくなるってことかいや、待て。いま提出してある映画脚本「緑色の血が流れる」は、どうなる。マイケル・ダグラスマイケル・ダグラスらと共演する映画の撮影から帰国して、早速呼び出され、いつもと変わらない無理難題をぶつけられてようやく書き上げて届けてあるあの脚本もまた、いつものように日の目を見ないのか。またも一円にもならず、流れる？ ん？ くそつたれ。

それでも私は、拳を握った。ガッポーズ。
やったよ。

もうあの苦しみから、すべて解放される。

すべてから解放され、解脱の高みにまで昇華した顔が、そこにあった。

見たことのない、想像すらできなかった、美しく安らかな、松田優作の顔。
生まれてから三十九年[＊]。どんな煩惱を背負い、背負わされてきたのか。

都内の一隅、住宅街にある邸宅付近には、悲報を知って駆けつけた大勢のファンが、異様な沈黙を保って立ちつづけていた。その人たちをかき分けて入った邸内。

原田芳雄が、遺体にずっと付き添っていた。

お互いに、かけあう言葉もない。

美しく、一点の曇りもない亡骸^{なきがら}は、生きている、としか思えなかった。

どうした？ 何があったんだ？ 急に、こんな汚れない顔をして。

一緒に死んでもいいと思った男が、憎くてしょうがなかった男が、いなくなった。
そのあたりから、私の記憶はぼんやりしている。

リアル感覚がはっきり戻ったのは、二日後。私は映画館の前に、いた。

既に日本で公開されてから一ヶ月ほど経っていたが、多忙と、言っても理解されにくい事情があつて、観ていなかった。

ポスター。日本公開版。

マイケル・ダグラス、アンディ・ガルシア、高倉健。三大スターの顔写真とともに、優作の顔が添えられている。

封切一ヶ月後の昼の上映なのに客は満員に近い。

ヤン・デ・ボン^{*7}の撮影、ハンス・ジマー^{*8}の音楽、リドリー・スコット^{*9}が仕切る『ブラック・レイン』は、メジャー製B級ムービーの典型のまま快調にダイナミックに始動し、マイケルとアンディ、ふたりの刑事が昼食をとるレストラン。ニューヨークシティ。

ヤクザの小僧が客を遊ばせる露払いをしたあと、――。

姿を見せた。

店の扉を開けて、やってきた。

モヒカン風刈り上げ。黒のロングコート。サン格拉斯。

引きつれてきた空気、殺傷の念が臨界に向けて一瞬で伝播してゆく。

その場の誰もが息を呑んで、氷りつく。観客も、だ。

ロボットではない。ふだんは三食静かに喰らうヒト、を匂わせてサン格拉斯をとり、睥睨するその演技、存在感。忽然と世界規模の映画に通用する俳優がそこにあらわれ、フィルムが俄

然^{ぜん}、熱^{あつ}くなった。

これは、……。私は胸が熱くなり、腰が浮いた。

十年前、私の前にあらわれた時^{よみがえ}が、蘇^{よみがえ}る。

姿が見えたのは午後の何時だったか、都心のビジネスビルの上階、外通路を斜め横からの西^{にし}陽^びを浴びてやってきた。

カーリーヘア、サングラス、デニムのスタジャン、ジーンズ。所属事務所の社長を従え、辺りを払う勢いでドアが開いたままの会議室に入ってきた。

引きつれてきた空気。むき出しの野心。さわると危険。のシグナルがストレートに伝播^くしてくる。

会議を中断して、みんなが立ち上がる。

東映系の製作会社、東映セントラルフィルム（のちのセントラル・アーツ）から、社長、黒澤満。プロデューサー・伊藤亮爾^{いとうりやうじ}＊10、柴垣達郎^{しがきたつろう}＊11。

番組企画書が通り放送が決定した日本テレビから、プロデューサー・山口剛^{やまぐちこう}＊12、チーフプロデューサー・加藤教夫^{かとうのりお}＊13。

さらに企画の原案者、小鷹信光^{こたかのぶみつ}＊14。脚本家チーム代表、佐治乾^{さけすけ}＊15。

『探偵物語』。

製作前の最後のトップ会議に、挨拶と打ち合わせを兼ねてやってきた二十九歳の主演者はサングラスをとる。誇張した眼力が透けて見える。

「松田です。よろしく。お願いします」

低い声。肚はらに響く。

再びサングラスをつけた松田優作は、下座にいる私のほうに一瞬だけ顔を向け、すすめられた上座を拒んで、テーブルをはさみ私の前に座った。

初対面の私は、黒澤満の引きで脚本家のプロデビュを狙う、この世界ではまだ全く無名のフリーランス。三十歳。会議の書記役だ。

大人気の松田優作、か。しかし、私の好きな俳優ではなかった。

「探偵ってやっぱり刑事のように公権力^{パッ}も捜査チームもないから、もっぱらひとりで、ここがミソ、ひとりで機智^{きち}、というか知恵と度胸とユーモアを駆使して依頼事の壁を突破する、これだよね。あなたがシリーズを単独で主演張るって聞いて相談受けた時、事務所をひとりで切り盛りする探偵、って設定^{シチュエーション}が一番いいんじゃないかと。発端はそういうこと」

企画の原案者、小鷹信光が、優作に丁寧な物腰で語りかける。翻訳などで海外のハードボイルド作品を日本に紹介しているヴェテランのミステリ評論家に、優作も丁寧な口調で応える。

『『マルタの鷹^{たか}』、ボガート^{*16}のイメージでどうかって話は聞きましたけど」

「うん、サム・スペード。いいと思うんだ」

「ハメット^{*17}ってどうなんだろ。ボガート^{*18}はチャンドラーもやってますよね。『三つ数えろ』でフィリップ・マローウ」

「チャンドラーは、ハメットと比べると甘すぎるかな」

「ハードボイルドとして？」

「うん。これ相当のハードボイルドで売るんだろ？」

と小鷹が山口剛を向く。

「そう。けっこうなハードボイルドで相当のアクションも盛り込む」

山口を継いで、加藤教夫も言う。

「カーアクション、ドンパチ、大いにやってもらう」

ひとりひとりの発言の要旨をメモする私の手が、だらけてくる。自分を売る熱意が、醒めてくる。

ハードボイルドって。本気でやろうと思っているのか。日本の、湿り気だけの風土、浪花節なにわぶしの感覚、気の利かない言葉、ドライをクールと勘違いしている役者と監督。日本の映画で一度も描けていないのに、テレビの枠でやるなんてお笑い草だ。私はプロの脚本家としてデビューできたら、どんなジャンルでも鋭意取り組んでいこうと思っているが、ハードボイルドだけは全くの範疇はんちゆう外、ましてカーチェイス、ドンパチのアクションシーンも積極果敢に採り入れるテレビドラマなんて。そっち方面の作品は観ることは観るがいっこうに興味を持たず、一応アクションの基礎を勉強して素養を身につけておくといったこともしていない。

煙草たばこを吸う優作の指先ばかりを、見ていた。長い指。ミスタースリム、細いロングサイズ。吸い口ギリギリまで指を寄せる。カッコいい。あるいはカッコつけすぎ。キザと野暮と粋が同時に煙になって吐き出される。

映画で何本も主役を張る役者、スターの生身が、目の前のそこにある。生まれて初めての経験。いささかの緊張と興奮はあるのかもしれないが、ときめくものがない。そこに、萩原健一、原田芳雄、桃井かおりの誰かひとりでも座っていたら、ハードボイルドとかアクションといったフレーズもどこかに飛んでいっていたら、私は最大限の売り込みに挑み、熱弁をふるっていいはずだった。

「チャンドラーは甘いって話だったけど、エリオット・グールド^{*19}はどうですか、マールウ、『ロング・グッドバイ』」

会議室から近くのビルのレストランの個室に移ってから、優作は主役の造形にこだわっていた。自分が描くヒーロー像を明確に伝えておきたい。これから佐治乾はじめ、起用が決まっている脚本家連中へ主人公のキャラクターと一話完結の物語のカラーに関してどういう伝達されるのか。混乱を招くことは避けたい。そういう意識は強く感じられる。

「マールウだったら、ロバート・ミッチャム^{*20}が一番しっくりくるよね、『さらば愛しき女よ』」
黒澤満が言い、山口たちが大きく頷く^{うなず}。

「ロバート・ミッチャム。ボガート。悪くないですけど、グールドだと思うんですけどね、この時代の感覚は」

この時代。一九七〇年代の終幕。優作の言う感覚とは。

ここにいる黒澤たち七人のエスタブリッシュメントは四十代で、今はもう古典、伝統的、正統派といわれるハリウッド映画の信奉者。

対する優作は、伝統的撮影所^{スタジオ}シネマの素晴らしさを認めながらも、抗^{あらが}う姿勢がにじみ出ている。

何をもって？ 例えばアメリカン・ニューシネマ。例えば、ロバート・アルトマン^{*21}監督。『ロング・グッドバイ』。煙草を休みなく吸いつづけ、愚にもつかない戯言^{たわごと}を吐きつづけ、正統派の探偵像に泥をぬりたくるフィリップ・マローウ。キメキメの芝居^{フレイ}を拒み、素に近いナチュラな演技と見せかけるグールド。

そうか。優作はそういう立ち位置にいるのか。目標はわかったが、現実に演^やっている主演作品の数々は、少なくとも私の目には、オーバーすぎる演技をする役者にしか映らなかった。

レストランの個室に移ってからは私からの距離が遠のいて、優作を時々しっかりと見ることができ。

東宝作品『乱れからくり』の撮影現場から駆けつけ、また戻るという優作は、酒を飲まず、ずっと煙草を吸いつづけ、プロデューサーらと意見を交わしつつける。

その風貌は。やはり一度見たら、たとえ俳優でなくても忘れることはできない。存在感がすごすぎる。

優作を最初に観たのは、いつだったか。

東宝作品『狼の紋章』だと思う。特異な風貌だけが印象に残る新人俳優だった。

この年、七三年は、私が会社勤めをやめ、フリーランスのコピーライターで糊口を凌ぎながら脚本家修業に専心しはじめた年だ。

学生時代、閉塞的な邦画に辟易していた頃、アメリカン・ニューシネマの洗礼を受けた。

『卒業』

『イージー・ライダー』

『明日に向かって撃て!』

『ジョンとメリー』

『真夜中のカーボーイ』

『スケアクロウ』

日本版のニューシネマ脚本を書きたいと意気込みは次々に湧いてきたが、じゃ誰を主役にするか、イメージする俳優がなかなか出てこない。

七二年に、松竹から『約束』が公開されていた。萩原健一のナチュラルな感覚に出会い、ときめいた。東宝の『青春の蹉跎』では、桃井かおりとのセクションで、我々の時代の『日常』や『等身大』を演じて、旧来の映画演技の枠をとっ払い、興奮させる。テレビ『傷だらけの天使』では、『スケアクロウ』のパシーノとジーン・ハックマンのニューシネマでしか描けない

関係を、水谷豊とのコラボで飄々^{ひょうひょう}と演技きっている。

同じ頃、松田優作は『太陽にほえろ！』で一躍注目を集め、映画『竜馬暗殺』で暗殺者・岡田^{だいら}以蔵を演じていたが、ここで共演した原田芳雄に、私は、萩原健一と似た興奮を覚えた。時代劇。坂本龍馬。原田芳雄が演じると現代にいてもおかしくない青年で、なにより演じることがナチュラル。そのあと『祭りの準備』で殺人犯を演^やるが、等身大のそこら辺になんとか生きている奴を、[〃]淡々と、しかし熱く[〃]フィルムに焼きつける。決してオーバーなこととはしない。萩原健一、原田芳雄、桃井かおりを心に描いて、私は、いっこうに売れない脚本を書きつづけた。

七八年には、につかつ撮影所の所長だった黒澤満——私はこの時に知遇を得ていた——から依頼を受けて一本シナリオを書いた。

黒澤は東映系の会社に移って、既に『最も危険な遊戯』をプロデュースしていた。その第二弾のシナリオが難産で、早急に何か青春活劇を書いてほしいというものだった。主演は、松田優作。

「カメレオン座の男^{*24}」というその脚本は、あっけなくボツとなった。

会議のあとの懇親会は、指名する脚本家三名を確認してお開きになった。私は結局選ばれなかった。帰りのエレベーター。優作と乗りあわせた。

「丸山さん。いつか、飲みましょう」

「あ、……」

それだけの、最初の会話だった。いつか、と言っても社交辞令のようなもので、もう会うこともないと思った。

ビルの外に出ると、スター松田優作に気づいた人々が振り返る。タクシーに向かう優作を見送った。異様に長い手と脚。このひとは、「ふつうの人」は演じられない……。

ただ……、実際に会うと、テレビや映画で観て聞くカン高い声や大仰な芝居仕立ての動きを、片鱗へんりんも感じさせない。俳優として、人間として、私の抱く印象が少し変わった。

「優作の、探偵のやつだけど、君も一本書いてみるか」

黒澤満からの電話。

あの会議から二ヶ月は経過したか。予期した通りなんの音沙汰もなかった。プロの脚本家をめざす自分の人生で、あの会議に出席したことが一番のピークで最大のチャンスだったのかも。しやうがない、自分に才能がないというより、縁がなかった。そう我が身に思いこませて、本当はかなり悔しく落ちこんだ数日間を胸のどこかに仕舞いこみ、食い扶持ふちのフリーランスの仕事に打ちこみ、新たなルートで売りこみをかけるオリジナル脚本の構想を練りはじめたところだった。

「あんまりハードなことばっかりやってると、テレビ観てる女子供に飽きられるって優作が言うんだよな」

「もう何本か脚本できてるんですか」

「うん。佐治さんの脚本とかどれも本格的なミステリアクションで日本テレビも乗ってるいいのができてきた。その準備稿を優作が見せろって言うから読ませてるんだけど。ちよっとソフトなものも視野に入れるかって話になってさ。オレは丸山君の持ち味、ユーモアと軽みかるがうまく出たら、うまく出せたらだよ、ハードなところもきちんと押さえて、それはそれで面白い探偵モノになるかな、と。逆の結果になるかもしれないが、とりあえず書いてみないか」

あくまでソフトタイプの番外編、その候補の一作という扱いで、書けば採用する確約は今回も担保できないと黒澤は率直に言う。

これは、……。

こういう類たぐいの風かはわからないが、風向きが変わってきた。敗者復活戦。オーバーか。ともかくハードボイルド一辺倒でなく、ハートフルなことも取りいれたらという優作のこだわり。優作に対して初めて親近感を持った。そのことも追い風になり、いそいそと東銀座のオフィスに向かう。

オフィスは、東映芸能ビデオの広大なワンフロアの一角にある。

『探偵物語』。脚本担当プロデューサーの伊藤亮爾、制作現場統括プロデューサーの紫垣達郎、

日本テレビの山口剛。この三名と、執筆が決まっている脚本家たちが、既に各人が用意したプロットや構想メモを基に入れ替わり立ち替わりで打ち合わせしていた。

聞いていると、もともとのハードボイルドタッチの路線は変わらないが、優作が言い出したソフトな感覚も入れるという、その解釈と度合いが、脚本を発注する側も、受けて執筆する側もなかなか決めがたく、かなり混乱している印象を受ける。

私が、三人のプロデューサーに招ばれた。

挨拶は二ヶ月前に済んでいる。伊藤が厳しい顔で話しかけてきた。

「黒澤さんから聞いているのは、丸山君はアクションものは苦手で、軽いコメディタッチの青春ものが得意なはずって言うんだけど、はず、だよ、自分ではどう思ってる？」

「人と人の関係がちゃんと描ければ、別にどのジャンルでも書きたいと思いますが、拳銃とかカーチェイスの車とか、メカニックなものが画面に出ると拒否反応が出ますし、敵対する相手がたいがい暴力組織とかの硬直したルーティンが圧倒的に多いんで、苦手という前にアクションものは魅力を感じません」

「じゃ、この企画も本当はやりたくない？」

「いや、優作氏がハード一辺倒じゃなくソフトな一面も出したいということで、そのソフトなところを少しじゃなくハード面を上まわるぐらいに描く番外編を、———ということを黒澤さんから言われてますが。聞かれてないですか」

「ハードを上まわるってのは、君の聞き間違いだ。ソフトな面という君のとらえ方もどうかと思うが、いくら優作の言うことでもこちらとしては聞けることと聞けないことがある。優作なしではこの番組はやってゆけんが、なしくずしの妥協はしない。で、どんな話を考えてきた？」

「シチュエーション・コメディです、非常にシンプルな」

ミッシェル君の真顔でドラマ制作をしている様子が、ある程度、番組の作り手側面を露出。アバウトを語られても、聞き手を騙めれた程度は、バジャマをだらしなくはだけたまま上品なスタンダを演ぜし、無類な無意味な笑く知らないお通の態度を演ぜ、怒らせる、他は、数え子の女子高生がボーイフレンドと胸で通んでいる時にやい囃んでしまったドラゴン物のハンデバッダを、警察を逃さずに持ち主に返し、お返しにしてほしい、というもの、バッダの中身あらたあるし、持ち主は同僚のスタ・ワードス（キャビンアテンダント）と説明、その後者のマンションを警察が訪ねるし、スタ・ワードスは機に乗りあがり、警察も何者かに襲われて逃げた、盗賊が戻った時、一機を奪った警察がすぐそこまで駆けつけており、このままではスタ・ワードス殺しの犯人捕らぬと警察、警察はマンションから逃がすも、盗賊と持ちあわせて、数え子を捕することにもなる、あのハンデバッダの中身が面白い、いう、と、そんな状況で捕ったのか、ボーイフレンドともにかかせる必要がある、警察が、警察を襲う決して手配し、盗賊が捕かれる、逃げて、数え子を捕らぬ、数え子、この盗賊者に

生きている松田優作

丸山昇一

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：2,200 円 (10%税込)

発売日：2025 年 8 月 26 日

I S B N：978-4-7976-7455-2

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)